

「buoyancy」—浮力が作用するモノ

画家としての戸谷の関心は、いつでも現象的な側面にあったように思われる。それはつまり、絵画がその「立ち現れ」において賭けられているということだ。例えば、山水画にみられる前景／遠景、あるいは再現性に関与する陰影法など、戸谷は東洋／西洋の絵画システムを積極的に画面の中に導入した時期を経ている。あえてそれらを衝突させ、統合できないある特異な場を生み出すこと。作家の言葉を借りるならば、絵画空間の中で二項対立による対比構造をいかに崩すことができるか、その飽くなき造形への意志を、これまでの絵画制作のほぼ全てに見て取ることが可能だろう。

近年の戸谷の作品には、比較的小きな6号のキャンバスが多く使用されている。それらは、画面サイズの縮小や筆致の減少に伴う図像の抽象化によって、何を描いたものかには判別できない特徴を帯びている。ただし、絵画を構成する要素の縮減と思われるそのようなミニマルな傾向もまた、作家の変わらぬ探究に繋がっているはずだ。なぜなら、筆触や色彩といった要素もまた、人間の悠久の営みとともに連綿と続いてきた絵画の制度に深く関わり、依然として絵画システムの内にあるものだからである。戸谷はそこでもまた隣接する筆致や、色相や明度、彩度といった色彩の関係を重視し、還元された要素間での対比構造の生成とその脱臼の可否に傾注してきた。

近年の作品に、《enter》(2019) という1点がある。「入る」という意味から付けられたその作品タイトルは、作家の関心が絵画の構造そのものにあることから、いっそう示唆的だ。黒と白のコントラストや、灰色のグラデーションは、奥行を知覚する鑑賞者の視線を捕らえ、絵画空間の中に招き入れる。この時、構成要素の還元は観賞体験の貧しさに決して直結せず、むしろ自然環境への対峙のように、絵画の内部に誘われた私たちはそれらの作品から、充実した感覚すら得ることだろう。「誘惑」と「囚われ」。そのように戸谷の絵画を理解する時、筆者の脳裏に思い浮かぶ言葉がある。鑑賞者だけでなく、戸谷もまた強固に作用する絵画システムに囚われた人物ではなかっただろうか。情報の生産と消費が無限に肥大化し続ける現代において、ほとんど忘却されている概念を持ち出すことが許されるならば、作家を永く捕え続けているのは「ポストモダンの呪縛」ではなかったか。

戸谷は、絵画を確かに描いている。しかし、その制作行為においては、ポストモダンと呼ばれた時代の絵画に顕著にみられた記号の過剰な戯れや、小さな物語の生成にいかに対抗するかにこそ、多くの労力が注がれてきたはずだ。そして、近年のサイズの縮小は絵画でありながら、また絵画でないという位相のズレを作品にもたらし、戸谷の絵画を現実存在するモノへと接近させている。絵を描く行為であることを時に忘れ、レリーフを制作している感覚になるという作家の言動は、このことの何よりの証左であろう。本展のタイトルである「buoyancy」は、「浮力」を意味する。重力をはじめとする様々な拘束から逃れることのできない身体や物体に対して働くこの力は、絵画空間を現実の世界へと接続する重要な鍵概念であり、さらにはポストモダンの円環から戸谷を解き放つための一つの可能性でもある。

森啓輔（もり・けいすけ）／千葉市美術館学芸員